

◆研究覚え書き◆

衆生を導くブツダの能力と *adhimutti* (*adhimukti*)

古川洋平

1. ゴータマ・ブツダの説法と救済

初期の仏教仏典（初期経典）^{〔1〕}に登場する釈尊（ゴータマ・ブツダ）は、衆生（生きもの）達を教え導く覚者（悟った者）として描写される側面が強いが、最初から悟りと衆生の救済が結びついていたわけではない。伝承によれば、釈尊は悟りを開いた後しばらくの間その喜びに浸っていたが、次のように考えたという。すなわち、「自分の悟った真理は深淵で、見難く、賢者にのみ理解できるが、この世の人々は執着にまみれている。故に、自分が教えを説いて

も理解できず、私は疲れるだけだ」
 （律蔵「小品」など）（趣意）と。釈尊の心を知った梵天はこのままでは世界が減びると考え、釈尊に三度、衆生への説法を願い出る（梵天勸請）。その際釈尊は、衆生に対する慈しみから仏眼によって世間を観察し、衆生には汚れの多い者・少ない者、宗教的な能力（機根）が鋭い者・鈍い者、よい特徴・悪い特徴をもつ者、認識させやすい者・させ難い者があり、さらにあの世と罪に対する恐れを抱いている者がいるのを見て、梵天の願いを聞き入れる形で説法を決意している。

は解脱に達した弟子達に対し、多くの人々の利益・安楽、そして世間の隣れみのために法を説き梵行（修行道）を明らかにせよと述べ、仏法の伝道を宣言している。その中で彼は、「世には」穢れわずかな性質の者達が居て、「法を」聞いていないので法から退失している。「聞けば」法をよく理解する者となるのである。「（律蔵「小品」など）と述べている。

右の梵天勸請と伝道の宣言の記述から分かるように、釈尊は、衆生の救済を目的として法を説きはするが、自分が教えを説くことであらゆる衆生を救うことが出来ると考えて

いたわけではない。釈尊は衆生のもつ機根や理解力などの良し悪しを見分け、相手に応じて説法すること（「対機説法」という）は出来ても、最終的な救済の可否は、あくまで彼の教えを聞く衆生側（仏弟子）に委ねられている。初期経典には、釈尊がバラモンや遊行者などに向かって説法をしても、帰依すら無しに去られるケースも散見される。初期仏教における教導者としての釈尊の力は、絶対的なものではないのである。仏弟子がブツダの教えに沿って自らを救っていくところに、仏教に通底する大きな特色があると言える。

2. 仏のもつ様々な能力

釈尊は上述の能力の他にも、様々な能力を有していると考えられている。最もよく知られているのは、六神通（六つの超人的能力）であろう。

ラモン達は梵天の世界に志向している (*adhimutti*)。私はバラ

モンであるダーナンジャーニに梵天と共住するための道を説示すべきだ』と。

引用前半部分は、舍利弗がダーナンジャーニを「劣った梵天の世界」ではなく、「優れたもの」としての解脱・涅槃に導くべきであった、という釈尊の立場を暗示するものである。それに対し舍利弗は、ダーナンジャーニが梵天界に「志向」「つまり心が向いていたために四無量心を説いたと答えている。各人の意志・意向を尊重する舍利弗と、可能な限り衆生を救済すべきであるとする釈尊の対比が興味深い。なお、ダーナンジャーニは死後、彼の思い通りに梵天界に生まれ変わっている。

その中の一つに、他心通（相手の心を知る能力）がある。『長部』第3「アンパッタ経」には、バラモン青年アンパッタが、ブツダ（覚者）あるいは転輪王となる者が具えると思われる三十二の偉人の身体的特徴（三十二相）を釈尊が具えているかどうかを調べるくだりがある。

彼（アンパッタ）は（釈尊の身体に）偉大な人物の特徴二つ、「つまり」陰部が入れ物に収まっていること（陰馬蔵相）と、舌が長大であること（広長舌相）について「は直接見るこゝとが出来なかつたので」、疑い、思い迷い、心を決めず（決意せず） (*adhimuccati*)、「心」落ち着かせ澄み渡らせないでいた。

釈尊は引用にあるアンパッタの心中を知り、陰馬蔵相と広長舌相を直接見たかのようにする神通力を行使

3. *adhimutti* の二つの特徴

以上、釈尊のもつ能力や教化に対する態度が垣間見える用例を取り上げてきたが、右に取り上げた二つの引用の下線部に使用されている「心を決める（決意）」・「心に向ける（志向）」という言葉は、パーリ語 *adhimutti*（サンスクリット語 *adhimukti*。漢訳「信解」等）という語を現代日本語で示したものである。*adhimutti* は、上の二つの他、修行者が瞑想行や観察行を行う中で対象に向けて心向け「固定」すること、釈尊に対する信心が強過ぎる余り「傾倒」してしまうこと、さらには、好ましい対象に対する「執着」など、多義的な側面を持っている。さらに一例を示す。『相应部』「界相应」に次のような記述がある。

している。

他心通を含む六神通は、阿羅漢となつた仏弟子も有している。『中部』第97「ダーナンジャーニ経」では、舍利弗が重篤に陥つた友人ダーナンジャーニの心が色界の一つ梵天界に向いていることを知り、梵天界に生まれるための修行法（四無量心）を伝授し、立ち去っている。その後、釈尊と舍利弗の間に次のようなやり取りがある。

（釈尊）「ではサーリプッタよ、どうして君はバラモンであるダーナンジャーニを、さらに為すべきことがあるにもかかわらず、劣った梵天の世界（梵天界）に止め置いて、座から立つて出発したのか？」と。

（舍利弗）「立派な方（世尊）よ、知つての通り、私は次のように思いました。（即ち、）『このバ

（釈尊）「比丘等よ、要素 (*dhamma*) *adhimutti* とは、衆生達は合流し、合わさっていく。劣つた志向 (*adhimutti*) をもつ衆生達は、劣つた志向をもつ（衆生）達と合流し、合わさっていく。すぐれた志向をもつ（衆生）達は、すぐれた志向をもつ（衆生）達と合流し、合わさっていく……」

右の引用では、優・劣の *adhimutti* を有する衆生達がそれぞれ同様の者達と合流していくと説かれているが、このように言えるのは、釈尊が衆生の *adhimutti* を見分ける能力を有しているからである。「界相应」では、高弟達を筆頭とする経行中の各集団を釈尊が指示して、例えば智慧第一の舍利弗を筆頭とする集団は皆大慧の者達であり、神通第一の目連の集団は皆神通力に秀でている等

と述べ、最後に提婆達多の集団は皆悪意ある者であると説き、右の言葉を用いてまとめている。これはまさに、現代で言う「類は友を呼ぶ」「同気相求む」ことを示している例と言えよう。後世の文献によれば、こうした同類の者に親しみ合流する際の決め手となるものが *adhimutti* (引用中の *dhamu* にあたる) とされる。*adhimutti* は、人が優劣の対象に心を向け、それを実現する「心の働き」としての側面とともに、個々人がもつ「気質」「性向」としての側面ももっているのである。

4. 「悟りを志向する者」こそ菩薩

初期仏教の衆生の *adhimutti* を知る釈尊の能力は、後世に成立した大乘経典にも受け継がれている。「法華経」「信解品」は、*adhimukti* を主

題とする章である。本章では、須菩提・大迦梅延・大迦葉・目連の四大声聞が釈尊に対し所謂「長者窮子の諭え」を述べる。以下の記述は、諭えのまとめ部分にあたる。

……我々(声聞)は、涅槃程度のもの(「窮子が求めていた」)日々の給金のように探し求めながら尋ね歩き、そして世尊よ、我々は獲得された涅槃によって満足した者となりました。……また、如来は我々の劣ったもの(＝涅槃)への志向性 (*hinadhimukkatā*) を理解しており、そしてさらに世尊は我々を達観し、関わることなく、「長者窮子の諭えの中では父から子に受け継がれる」如来のこの知の蔵(＝仏知見)、それこそが君達のものとなるであろう」とは述べませんでした。……そ

て、この「教え」を説いており⁽³⁾ます。

右の引用において釈尊(釈迦仏)は、初期経典で説かれる衆生の *adhimutti* を知る釈尊の性格を受け継ぎつつ、「劣ったもの」(＝解脱・涅槃。初期経典では「優れたもの」に含まれる)に *adhimukti* を抱く旧態依然の阿羅漢である声聞達に改心を促している。そして、この「劣ったもの」と対になる「優れたもの」とは、菩薩道の終着点にある「悟り(ブツダの智慧。仏知見)」に他ならない。「信解品」において菩薩は、何よりもまず「悟りを志向する者」であるべきことが強調されているのである。先述したように、*adhimukti* を抱く主体はあくまで仏弟子達自身であり、悟りを目指すためには、彼等が己の「志」(*icchāsaṅgā*)「*adhimukti*」を変えていくしかない。

とはいえ、説法を通じて解脱・涅槃から悟りへと、聞き手の *adhimukti* に変革を促そうとする点に、初期仏教よりも衆生の救済を積極的に進めようとする釈尊の性格が読み取れる。ブツダの能力と *adhimutti* (*adhimukti*) の特徴に焦点を当てる中で、『法華経』の「初期仏教の枠組みを批判的に乗り越えようとする側面を指摘した。大乘経典を初期仏教の伝統から断絶した資料と見るのではなく、仏教用語の精密な検討を通じて両文献に通底する部分を探っていく研究は、今後のインド仏教研究において有益な視点を提供するものと考えられる。

注

- (1) 本稿に引用する初期経典のテキストは Pali Text Society 版を底本としている。
- (2) 本節の詳細は拙稿「パーリ文

の「我々が仏知見を望まない」原因は何かという点、如来は手立て(方便)によって我々の志向 (*adhimukti*) を理解しているのに、「我々が」本当の世尊の息子である」という世尊が今語ったことを、我々は知らず、悟ることもないからです。……もし「今」、世尊が我々の志向の力を見たなら、世尊は我々を「菩薩」と名付けるでしょう。さらに世尊は、我々に二つの行いをさせています。「すなわち、世尊は我々」菩薩たちに、一方では「君たちは」劣ったものへの志向をもつ者達 (*hinadhimukka*) である」と言い、また他方では、ここにいる「我々菩薩達」を広大なブツダの悟りへと促してきました。そして今「まさに」、世尊は我々の志向を知っ

- 献中の *adhimutti* について——
hinadhimuttika / *hinadhimutta* の事例から——(「パーリ学仏教文化学」第三十四号、二〇二一年、八五―九八頁)を参照頂きたい。また、*adhimutti* / *adhimukti* については水野弘元『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』(東京：山喜房佛書林一九六四年)四五―四六一頁・櫻部健「増補版佛教語の研究」(京都：文栄堂書店一九九七年)三四―三九頁；Giacomo Benedetti, "The Etymology and Semantic Spectrum of *adhimukti* and Related Terms in Buddhist Texts", (*Buddhist Studies Review*, 36-1, pp.3-30) が参考になる。
- (3) 本例の原文は所謂ケルン・南条本 (*Kern and Nanjo: Saddharmapundarika* (Bibliotheca Buddhica X, 1908)) によった。

(ふるかわ ようへい) / 東洋哲学研究所研究員、桜美林大学非常勤講師